

佳作

平成最後の高校生にとって『学問のすゝめ』は有用か

はやさか
早坂 章
あまろ

(奈良県／天理高等学校一年)

1. はじめに

実学とは、どういった学問を指すのだろうか。辞書を引くと、実学とは実生活や社会に役立つ学問を意味し、医学や法学、経済学、工学などがそれに該当するとのことである。実際、現代社会は科学技術の発展とともにあると言え、たえず発展を繰り返す科学なり学問なりがその支えをしていると言って間違いないであろう。

『学問のすゝめ』において福澤諭吉(以下、福澤)は、「されば今、かかる実なき学問はまず次にし、もつぱら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」と説いたうえで、その実学の例として次のように述べている。すなわち「いろは四十七文字を習い、

手紙の文言、帳合いの仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき簡条ははなはだ多し。地理学とは日本国中はもちろん世界万国の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見て、その働きを知る学問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて万国古今の有様を詮索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは身の行ないを修め、人に交わり、この世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり」(注1)。

福澤が説く実学は、『学問のすゝめ』だけでなく他の彼の様々な著作を踏まえると、単に実用的な学問という意味ではなく、「科学的・実証的精神に根ざした学問」(注

2)、つまりサイエンス(science)であると解説される。そうした解説に異論はないものの、しかし『学問のすゝめ』のみを素直に読めば、実学とは、実生活・社会で生きるのに役立つ学問であると解釈でき、福澤はそうした学問こそを学ぶべきで、さらに突っ込んで言えば、「実学を生きていくための武器とせよ」と主張しているように私には読める。もちろん、現在において経済学や哲学などが実用的であるかどうかは意見が分かれるであろう。しかし、役に立つかどうかの議論が重要なのではなく、福澤はそうした学問を実学と捉えているのであり、人生に生かすよう勧めていると私は解釈した。

実学の有用性を説く『学問のすゝめ』は、当然のことながら書かれている内容自体が実生活や人生に役立つことを志向しているはずであるが、果たして同書の内容は、現代に生きる私のような高校生にとっても役立つ内容であろうか。『学問のすゝめ』が出版された明治の時代から、現在ではすでにおよそ一五〇年が経過している。第二次世界大戦で壊滅的な被害を受けたものの、戦後日本経済は奇跡的な復興・成長を遂げ、福澤が生きた時代の生活水準や教育水準と

現代のそれを比較すると、格段に向上している。しかし、生活環境や経済状況は豊かになったものの、それらに比例して、我々日本人が精神的に成熟したと言えるかは、昨今の政治家や官僚の汚職事件、あるいは悲惨な殺人事件などを見るに、残念ながら肯定的には考えにくい状況にある。

本稿では、『学問のすゝめ』が実生活や人生に役立つ内容であることを想定し、実用的な観点から福澤の言説を取り上げ、現代の日本においても『学問のすゝめ』が実学の書としての役割を果たし得るかを考察してみたい。ただ、政治・経済など現在の社会情勢をマクロに捉えて論じるのではなく、あくまで私自身の実生活における実感をベースに論を進めたい。

2. 『学問のすゝめ』とはどういった書か

「学問のすゝめ」という言葉を知らない高校生は、ほとんどいないと思われる。一万円札の顔写真とともに、福澤諭吉とセツトでよく知られているし、書き出しの「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という一文は、福澤の名言として有名である。しかし、『学問のすゝめ』のその先を読んだことのある高校生は、どれほど

いるだろうか。明治大学教授の齋藤孝氏が、自身が教える学生数百人に同書を原文で読んだことがあるか尋ねたところ、読んだことがある学生は皆無であった(注3)。ましてや高校生に同様の質問を投げかけてみても、おそらくほとんどの者が読んだ経験はないと答えるはずである。この傾向は学生だけでなく、予想するに大人も大差ないであろう。

まずこの章では、私自身の勉強も兼ね『学問のすゝめ』がどういった書であるかを概観してみたい。かく言う私も、『学問のすゝめ』を読んだのは本稿執筆がきっかけであり、いきなり原文を読み進めることは到底できず、現代語訳版や解説本に頼りながら徐々に理解を深めた。

『学問のすゝめ』が出版されたのは明治維新から数年後のことで、一八七二(明治五)年から一八七六(明治九)年にかけて全十七編の分冊として発行され、一八八〇(明治十三)年に合本して一冊の本となった(初編から十七編の全十七章)。一八八〇年時の福澤の試算によると、およそ七十万冊も発刊されたとしている。「初編」だけでも偽版本を含めると二十二万冊に上るとされ、当時の人口がおよそ三、五〇〇万人で

あること、また書物の流通網や識字率なども考えると、今であれば一千万冊程度売れるぐらいの大ベストセラーであったと言えるかもしれない(注4)。

『学問のすゝめ』は、元々は福澤の郷里である中津(大分県中津市)に開校された市の学校の学生や教員に書かれたパンフレットであったが、人の勧めに従って慶應義塾で活字版にしたところ、非常に好評を博すこととなった。つまり、同書は不朽の名著との評価を受けているものの、決して遠大な計画や抱負を持って着手したというわけではなく、いわば偶然の機会によって広く世に出版されることになったのである。ただし、福澤が同書で主張する内容そのものは決して一時の着想ではなく、著述の前後にわたって福澤の生涯を貫く普遍のものと評価されている。福澤は、「幕府時代に私の著わした西洋事情なんぞ……一口に申せば西洋の小説夢物語の戯作くらいに自から認めていたものが、世間に流行して実際の役に立つのみか、新政府の勇氣は西洋事情の類でない、一段も二段も先に進んで思い切ったことを断行して、アベコベに著述者を驚かす程のことも折々見えるから……コリヤ面白い、この勢いに乗じて更に大いに西

洋文明の空気を吹込み、全国の人心を根柢から転覆して、絶遠の東洋に一新文明国を開き、東に日本、西に英国と、相対して後れを取らぬようになられまいものでもない」と、ここに第二の誓願を起こして：専ら塾務を務め、また筆を弄び、種々様々の事を書き散らしたのが西洋事情以後の著訳である」と述べている。その著訳に当たるものが、第一に『学問のすゝめ』ということになる(注5)。

『学問のすゝめ』は、タイトル通り学問(勉強)の重要性を説いている。なぜ勉強しなければならぬのかと言えば、それは一人ひとりが独立した人間になる必要があるからと、福澤は力説する。福澤は、国民一人ひとりが独立するためには学問を学ばなければならぬと述べており、しかもその学問は実学でなければならぬとしている。実学と対極にある学問(虚学)とは、ただ難しい字を知り、難解な古典を読み、また和歌を楽しんだり詩を作るといったような実用性のない学問(文学)であるとす。そうした学問も「おのずから人の心を悦ばしめずいぶん調法なるもの」としつつも、「世間の儒者・学者などの申すよう、さまであがめ貴むべきものにあらず。古来、

漢学者に世帯持ちの上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人もまれなり。これがため心ある町人・百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟その学問のみに遠くして日用の間合わぬ証拠なり」(注6)と、在来の儒学や和学といった学問を痛烈に批判している。

また、『学問のすゝめ』では、学問には目的があると述べられている。人間はみな平等に生まれてくるが、それは学問を学ぶか学ばないかによつて差が生じると主張される。つまり、社会や人生に役立つ学問である実学を懸命に学ぶ国民が多くなるほど、その国はより平和で安定した社会になるのであり、私達国民一人ひとりは実学に励むべきだと福澤は説く。

福澤が同書で述べることには、現代でもそのまま通用する普遍的な論理が多々含まれている。例えば、福澤の人権意識は現代でも通用するものであり、江戸時代の常識となつていた『女大宇』の偏つた内容も批判している。男女差別の問題は昨今の日本でも未だ発生し続けているが、近代国家日本の始動時にすでにそうした問題提起が行

われていたことからは、福澤の優れた先見性が窺える。と同時に、今も類似の問題を我々現代人が克服できていないことに落胆してしまふ。

3. 自己実現の在り方と公共の精神

『学問のすゝめ』を読み進める中で気付くのは、福澤が主張する様々な事柄には、その前提として公共に対する貢献、または日本という国に対する献身的な精神、愛国心が強力に働いているように感じる点である。この点は、私にとつて新鮮である。例えば学校では、目標や将来の夢を定め、その達成に向けて努力するようこれまで促されることがあつた。促されるテーマとなるのは、たいてい勉強やクラブ、将来就きたい職業などのことであり、自分のために懸命に努力するよう促されてきたように思う。世の中に貢献できるように勉強せよとか、公のために何か行動を促されることはほとんどない。このことに特に不満があるわけでもないし、『学問のすゝめ』を読むまでそうしたことは考えもしなかつた。だが、福澤の言説を受け止めると、もう少し私達の目が公共の貢献へと向けられなければ、福澤のような気概は中々起こらないの

ではないかと感じる。これはいわば、現代における「自己実現」の在り方の問題ではないかと思われる。

公共の精神や自己実現の在り方に思考を巡らすと、教育の問題と結びついてくる。教育における公共の精神に関する議論については、近年の注目すべき動向の一つとして二〇〇六年の教育基本法の改正が挙げられる。改正前の教育基本法では、「個人の尊厳」など個人に関することに重点が置かれていたが、改正教育基本法では「公共の精神」が新たな教育目標に付け加えられた。戦後約六十年で、教育の在り方が見直されたと言える。

この改正にあたっては、教育改革国民会議での議論が大きな影響を及ぼしている。例えば「人間性」を検討した第一分科会では、教育基本法では「個人や普通の人類などが強調され過ぎ、国家や郷土、伝統、文化、家庭、自然の尊重などが抜け落ちている」との意見が出たり、教育基本法は「専ら個人の尊重をうたっていて、これが利己的な個人意識を生んでしまっているのではないか。そこに公共の福祉の概念が欠けているのではないか」との指摘がなされた（注7）。かつて日本は、個人の大切に

さよりも「公」の大切さを説いてきたとされる。しかし戦後の教育では、今までの日本の教育は間違っており、もっと個人を尊重する教育でなければいけないということ、「公」よりも「個」を強調するようになった。しかし戦後から現代にかけて、あまりにも「個」を強調しすぎたため、「公」と「個」の調和は乱れ自己中心的な者が増えてしまったと言われている。

教育基本法の改正から現在ではすでに十年以上が経過しているが、学校で公共の精神について話を聞くことはほとんど無いように思う。もちろん、旧教育基本法は一九四七年に公布・施行されたものであり、約六十年の影響が全く消え去るにはしばらくの期間を要するであろう。

「個」に重点が偏った教育を受けた者達が自己実現を考える時、その自己実現は自分のためだけのものであり、他者や社会に貢献しようというものでないことは当然のことと思われる。実際、自分の友人らを見ていても、自分の目標や夢の理由を問われた時、「楽しそうだから」、「良い仕事に就くと安定するから」といった自分の幸福のためだけを理由とする者がほとんどであるように感じる。このように自己実現を何で

も自分本位で思考してしまっただけでは、自己中心的な人間をより多く育成しているようなものである。河合隼雄は、「今は自分の好きなことをやってなにかを成し遂げるのが自己実現だと思われているが、そんなものは自我実現であり、奉公し、犠牲を払い、献身し、それによって何かを成し遂げるのが本当の意味での自己実現だ」（注8）と語っている。自己実現が重要であることは間違いないが、あくまでそれは社会貢献であったり、世の中の役に立ちたいという思いから発せられるのが望ましいのである。

現代人にはその精神が弱いことが問題であり、その点は強調すべき教育の課題であると思われる。

では、「個」に関する教育が成功しているかと言えば、そうとは言えないようにも思う。福澤が強調する国民一人ひとりの「独立」が実現する日は迎えられるのである。公共の精神と独立の精神は対立関係にはならず、両方の精神は同時に成り立つものと考えられる。

4. 福澤諭吉のバランス感覚

前の章では、福澤に強く内在する公共の

精神や愛国心について述べたが、今の時代にこうした内容に触れ肯定的な見解を示すと、すぐに右翼であるような認識をされたり、全体主義を肯定しているかのように認識される恐れがあり発言がしづらい状況にある。しかし、福澤の言説はそのような疑いには全く当てはまらず、むしろ個人「権利」を力説している。「天の人を生ずるや、これに体と心との働きを与えて、人々をしてこの通義を遂げしむるの仕掛けを設けたるものなれば、なんらのことあるも人力をもつてこれを害すべからず」と述べ、「大名の命も人足の命も、命の重きは同様」であると説く(注9)。

また、政府と人民についても、その関係性は対等であることを説いている。「百姓は米を作りて人を養い、町人は物を売買して世の便利を達す。これすなわち百姓・町人の商売なり。政府は法令を設けて悪人を制し、善人を保護す。これすなわち政府の商売なり。この商売をなすには莫大の費えなれども、政府には米もなく、金もなきゆえ、百姓・町人より年貢・運上を出だして政府の勝手方を賄わんと、双方一致のうえ相談を取り極めたり。これすなわち政府と人民との約束」(注10)であることを指摘する。

福澤の権理の在り方に関する譬えがまた痛快であり、社会的に権力があるからといって社会的弱者の権理を侵害するのは、「これを譬えば力士がわれに腕の力ありとて、その力の勢いをもつて隣の人の腕を捻り折るがごとし。隣の人の力はもとより力士よりも弱かるべけれども、弱ければ弱きままにてその腕を用い自分の便利を達して差つかえなきはずなるに、いわれなく力士のために腕を折らるるは迷惑至極と言うべし」(注11)と解説する。

つまり福澤の言説は、「個」と「公」のバランスが絶妙に保たれており、しかもそれら二つは対立の関係にあるのではなく、むしろ相乗効果を生んでいるような気さえしてくる。「個」を磨き独立の精神を養うことが、すなわち公共への貢献へとつながり、「公」の精神を強く自覚することで、ますます個人の独立心は磨かれるということであろう。

福澤のバランス感覚については、もう一点指摘しておきたい。それは、「学問」と「実務」のバランスである。私の知る限り、社会で働く人の職業はたいてい一つであると思われる。何かしらの職種につき、どこかの組織に属しているのが一般的であると認

識している。何か一つ専門として取り組んでいることがあり、長年そのことに励むことで熟練していく。もちろん、専門というほどのこともない仕事もあるかもしれないが、何か特定の分野で仕事に就いているのはほとんど間違いはないはずである。また、生涯働いて、何か社会に大きな影響を与えた自分の成果というものを明確に語る事ができる人が、何人いるであろうか。特定の専門分野において、社会に認知される成果を一つ上げるだけでも大変なことに思われる。しかし福澤は、特定の分野のみならず、複数の分野で優れた業績を残している。学者や教育者、事業家の側面だけでなく、思想家、啓蒙家、ベストセラー作家などの顔もあわせ持つ。特に注目したいのは、学問を深く修めながら、同時に様々な実務に取り組んでいることである。学問の世界だけではおそらく抽象的な理解で留まつてしまうところを、実務に積極的に取り組み、その実務に修めた学問を生かしているところに凄みがあるように感じる。学問だけではわからない、実務だけでもわからない物事の本質を、福澤は彼独自のバランス感覚でつかんでいたのではないだろうか。

5. おわりに

ここまで、『学問のすゝめ』を読むことが私のような現代の若者にとっても有用であるかという視点で、福澤の様々な言説を取り上げ論じてきた。結論として、本稿のタイトルである「平成最後の高校生にとっても『学問のすゝめ』は有用か」という問いに対しては、大変有用と答えざるを得ない。同書が出版されて現在では一五〇年を経ているにも関わらず、到底福澤が期待するほどまで我々日本人が精神的に成長を遂げているとは言い難いように思われる。むしろ、世の中のために何かを成したいという気概は福澤が生きた時代よりも弱まっているのではないかとも思ってしまう。もちろんそれは日本が先進国の仲間入りをし、成熟社会へと変化しているからであるとは思うのだが、成熟しているというのであれば、もともと自分本位から離れて物事を考えられないかと思ってしまう。しかし同時に、

社会が成熟し人々がハングリー精神を失えば、自分のため、他人のためということは関係なく、懸命に努力して何かを成そうなどとは思いにくくなるのかもしれない。そんな大袈裟なことよりも、何か楽しいこと、安定して暮らしていきけることに思考が向かうのはわかる気もしてしまう。

もしかすると、『学問のすゝめ』は現代においては自分達はどのように生きるべきかということを問いかける「問題提起の書」となるのかもしれない。幸い、近年は様々な分野において「わかりやすさ」を追求した書物が多々出版されており、『学問のすゝめ』についても優れた現代語訳版や解説本が容易に読める。今後、私の長い人生の中で『学問のすゝめ』とどのように関わることになるのか、長い付き合いとなる気がする。

〈注〉

〔注1〕福沢諭吉『学問のすゝめ（改版）』岩波書店、二〇〇八年、一三頁

〔注2〕山本正身「福沢諭吉―日本における『近代教育思想』の一範型―」沖田

行司編『人物で見る日本の教育 第二版』ミネルヴァ書房、二〇一五年、九六頁

〔注3〕福沢諭吉著、齋藤孝訳『現代語訳学問のすゝめ』筑摩書房、二〇〇九年、三頁

〔注4〕岩谷十郎「入門・『学問のすゝめ』―その成立と内容と―」

『三田評論』一一五五号、二〇一二年、二六一―二九頁

〔注5〕福沢諭吉著、富田正文校訂『新訂福翁自伝（改版）』岩波書店、二〇〇八年、三八九頁

〔注6〕福沢諭吉『学問のすゝめ（改版）』岩波書店、二〇〇八年、二一―一三頁

〔注7〕教育改革国民会議「第1分科会―人間性―」首相官邸、二〇〇〇年

[<https://www.kantei.go.jp/jp/kyouiku/dunkakai/dex.html>]

〔注8〕河合隼雄『いのちの対話』潮出版社、二〇〇二年、九三頁

〔注9〕福沢諭吉『学問のすゝめ（改版）』岩波書店、二〇〇八年、二四頁

〔注10〕福沢諭吉『学問のすゝめ（改版）』岩波書店、二〇〇八年、二六頁

〔注11〕福沢諭吉『学問のすゝめ（改版）』岩波書店、二〇〇八年、二五頁

〈参考文献〉（注に記載したものを除く）

福沢諭吉著、齋藤孝訳『13歳からの『学問のすゝめ』』筑摩書房、二〇一七年

橋本治「福沢諭吉の『学問のすゝめ』」幻

冬舎、二〇一六年

小室正紀編『近代日本と福澤諭吉』慶應義

塾大学出版会、二〇一三年
福澤諭吉著、小室正紀・西川俊作編『学問

のすゝめ』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年

会田倉吉『福沢諭吉』吉川弘文館、一九八五年

小泉信三『福沢諭吉』岩波書店、一九六六年